

縄文遺跡群の世界遺産

| | | | | | | | | | | | |
|-----|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|---------|---------|---------|-----------|
| | B.C.13,000 | B.C.9,000 | B.C.5,000 | B.C.3,000 | B.C.2,000 | B.C.1,000 | B.C.300 | A.D.300 | A.D.600 | A.D.800 | A.D.1,200 |
| 日本 | 縄文時代 | | | | | | 弥生時代 | 古墳時代 | 飛鳥時代 | 平安時代 | 鎌倉時代 |
| | 旧石器時代 | 草創期 | 早期 | 前期 | 中期 | 後期 | 晩期 | | | | |
| 北海道 | 縄文時代 | | | | | | 続縄文文化 | | 縄文文化 | | アイヌ文化圏 |
| | 旧石器時代 | 草創期 | 早期 | 前期 | 中期 | 後期 | 晩期 | オホーツク文化 | トドナイ文化 | | |

「縄文遺跡を世界遺産にしよう！」という取組が進んでいます。

これは、北海道・青森・岩手・秋田の4道県と縄文遺跡が存在する13市町が共同で、この地域の17カ所の縄文遺跡を「北海道・北東北の縄文遺跡群」としてユネスコの世界文化遺産に登録しようというものです。北海道には、函館市(2)、洞爺湖町(2)、伊達市(1)、千歳市(1)の6つの構成資産と1つの関連資産(森町)があります(下図)。

この2月に推薦書が日本政府からユネスコに提出されたので、順調に進めば2021年の夏には北海道初の世界文化遺産が誕生するのですが、そもそも「縄文ってなんだろう?」とか「縄文遺跡が世界遺産になるのだろうか?」という疑問も多いことかと思えます。

本稿ではこの紙面をお借りして、そうした疑問にもお答えしたいと思います。

縄文文化の始まりと地球温暖化

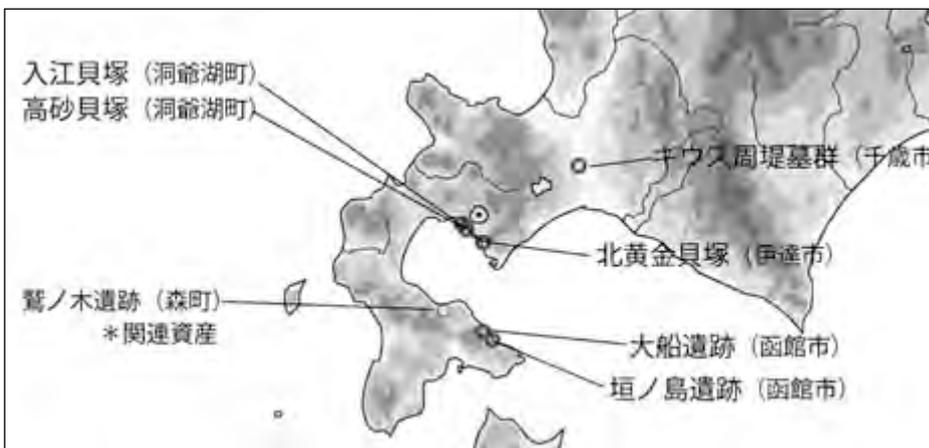
縄文文化を理解するには、地球の歴史から見ていかなければなりません。

地球の過去100万年の歴史を見ると、10万年を一つの周期として、8万年の氷期と2万年の間氷期を繰り返していたことがわかります。これは地球の自転や公転周期などの変化で起きるもので、氷期は乾燥・寒冷した気候に、間氷期には温暖・湿潤な気候になります。

直近の氷期では、2万年前～1万6千年前が最も寒

く、氷床の発達により海水面が現在より120mも低かったため、間宮海峡と宗谷海峡は陸地になり、北海道はサハリン島と繋がって大陸から伸びる半島の先端になっていました。この時代は旧石器時代に区分されます。人々は石器で作られた狩猟具を携えて大陸から北海道に移動し、食料となるマンモス、バイソン、オオツノシカなどの大型草陸獣を追いながら「移動生活」をしていました。

ところが、今から1万5千年前に世界規模の温暖化が始まります。その頃の日本海は大きな湖でしたが、海水面の上昇とともにほぼ閉じていた対馬海峡が大きく開き、日本海に対馬暖流が流れ込んで北上します。また、太平洋側では暖流の黒潮が北上することによって、日本列島は夏に雨が多く、冬には雪が積もる温暖・湿潤な気候に変化しました。この気候変動でマンモスなどの大型陸獣は絶滅しますが、当時の人々は活発に



登録に向けて

阿部 千春 (あべ ちはる)

北海道環境生活部 文化局 文化振興課 縄文世界遺産推進室
特別研究員

1959年北海道赤平市生まれ。83年、立正大学文学部史学科（考古学専攻）卒業。同年（財）北海道埋蔵文化財センター嘱託、89年南茅部町教育委員会文化財係、2011年函館市縄文文化交流センター館長、15年から現職。主要著書に『縄文時代の考古学6』『アスファルトの供給』同成社、『津軽海峡圏の縄文文化』（共編：安田喜憲）雄山閣などがある。日本考古学協会会員、（財）道南歴史文化振興財団アドバイザー。

なった海流や落葉広葉樹に変わった森林など、周辺の自然の恵みを巧みに利用することで「定住生活」へと移行しました。これが縄文文化の始まりです。

【北海道・北東北】に共通した地理的特徴

縄文文化の特徴は、狩猟・採集・漁労を生活基盤としながら定住生活を実現し、気候変動に対応しながら一万年以上も存続したことです。また、その間に土偶や環状列石に見られるような高い精神活動があったことも特筆すべきことです。世界の先史文化を見ると、移動生活から定住生活への移行は、農耕や牧畜が始まり食料の余剰生産を備蓄できるようになってから実現するので、縄文文化は極めて希な文化と言えます。

一見すると、自然の恵みのみで生活するよりも、人間が自然を開拓して行う農耕の方が高度で文化的だと思うかもしれません。確かに数十年単位で見ればそうでしょう。ただ、数百年、数千年単位で見れば、森や川、そして海など、集落周辺の自然の恵みのみで定住生活を長期間存続させることがどれほど難しいか、また、それを実現するために、どれだけの知識、技術、システム、あるいは精神活動の蓄積と継承が必要だったのか、想像を巡らすと考えが変わるかもしれません。その蓄積と継承の場こそが、人々が集って暮らす家や

集落だったのです。

縄文文化は日本列島全体に広がっていました。気候の厳しい北海道においても道東や道北には数多くの縄文遺跡があります。では、なぜ世界遺産にエントリーする範囲が北海道と北東北なのでしょう。しかも、北海道は石狩低地帯から南に限られています。

これは、縄文文化が6つ程度の地域性の強い文化圏に分かれていたことが背景にあります。縄文文化はどこでも同じように思われがちですが、実は「縄文文化」とは、この地域文化圏の集合体を指しているのです。これは日本列島の地理的な特徴に起因しています。ご存じのとおり、列島は北海道島から沖縄諸島まで南北3千kmを越えて細長く連なっているため年平均気温にも地域差があり、それぞれに異なる森の植生が広がっています。また、海流の違いにより海の生態系も異なっています。気候変動を乗り越えながら周辺の自然の恵みで生活するなかで、その地域に特有の文化が形成されたのだと考えられています。

そのなかで、北海道南部と北東北は海洋資源で見ると暖流と寒流の交わる地域であり、森林資源では冷温帯落葉広葉樹林（北方ブナ帯）という南と北の両方の特性を持った地理的環境にあり、両方の自然の恩恵を得られる地域です。例えば、暖流魚のマグロやブリも捕れるが、寒流魚のサケやマスが回遊し川を遡上するという利点があります。また森林ではドングリやクリも採れるが、山岳地に繁るブナが集落をつくる平地まで広がりブナの実も確保できることなどです。

こうした自然環境を背景にして、この地域では縄文時代の始まりから終わりまで一貫して縄文文化が栄え、その遺跡が良好に現在まで保存されてきました。「縄文一万年の歴史を一つの自然環境のもとで語ることができる」ということもあり、この地域のなかから遺跡が選定されています。

北海道の構成資産

縄文文化の世界遺産としての顕著で普遍的価値

(OUV/Outstanding Universal Value) は、一万年以上にわたる生活のあり方の変遷(集落構造の変化)と、その間に高度に発達した精神文化にあります。構成資産となる遺跡にはそれぞれに特徴があります。北海道の構成資産については、このシリーズで詳しく取り上げることになっているので、ここでは時代の古い順番に概要だけ紹介したいと思います。

垣ノ島遺跡(函館市) 約6500年前

居住域と墓域が分離した頃の集落で、墓には大型の合葬墓と通常の単独墓があります。墓からは幼児の足形を押し付けた粘土板が副葬されている例があるなど、当時の葬送や精神性が分かる遺跡です。その後、約4000年前になると長さ190mを越える盛土遺構(土器や石器等の送り場)がつけられます。

北黄金貝塚(伊達市) 約5500年前

温暖期の貝塚を伴う集落で、貝塚からは気候変動に準じた魚類や貝類が堆積するほか、ヒトの墓もつくられています。また貝塚の低位には湧き水が流れ、すり石や石皿などの石器が大量に廃棄されており、廃棄に伴う祭祀が行われていたと考えられています。

大船遺跡(函館市) 約4500年前

大型の住居を伴う拠点集落で、深さ2mを超える^{たて}堅穴住居跡や食料の貯蔵穴が密集しています。またクジラ、マグロ、オットセイなどの海洋資源のほか、クリなどの森林資源やヒエの種子も出土しており、当時の生活基盤や集落の様子が分かります(写真)。



入江貝塚/高砂貝塚(洞爺湖町)

約4000年前/約3000年前

入江貝塚は貝塚を伴う集落で、貝塚からは幼い頃にポリオに罹り、成人を過ぎるまで生きていたことが分かる人骨が見つかり、集落内の相互扶助の様子が伝わってきます。高砂貝塚は貝塚を伴う集団墓地で、土偶や土製品など精神活動に伴う遺物が出土しています。

キウス周堤墓群(千歳市) 約3500年前

土壘を伴う大規模な集団墓地で、円形の堅穴を掘ってその外側に土壘を造成し、内側に複数の墓を配置しています。最大のもは直径75m、土壘までの高さが5mを超えるものもあります。北海道独特の墓制で、当時の社会構造のあり方が読み取れます。

鷺ノ木遺跡(森町) 約4000年前(関連資産)

北海道最大級の環状列石で、大型の^{れき}礫を二重に配置し直径は約37mもあります。隣接して堅穴墓域が確認されているほか、当地の名物である「イカ飯」に似た土製品も出土しています。なお、この環状列石は高速道路の建設中に発見され、保存のためにトンネルを手作業で掘るなど現状維持に最善が尽くされました。

世界遺産登録の意義と可能性

縄文遺跡群の世界遺産登録の意義や効果について4つの視点で考えてみましょう(右ページ図)。

一つ目は文化政策の視点です。世界遺産条約の目的は、人類共通の財産として適切に保存して後世に引き継ぐことにあります。自然環境の変化に対応しながら一万年にわたって存続した縄文文化の価値を世界が認め、保護していくことは、国際社会における日本の歴史・文化の理解にも繋がるものと期待しています。

二つ目は教育的な視点です。自分たちが暮らす地域、そして北海道には「世界遺産になるような文化があるんだ」ということを知り、そのことを誇りに思うことが郷土を愛する気持ちに繋がり、まちづくりの基盤と



なるのだと思います。また、世界遺産以外にも今まで気がつかなかった文化財、もっと身近にも貴重な文化遺産があることに気づき、それを地域の宝として大切に作る気運が醸成されることでしょう。

三つ目は地域振興の視点です。世界遺産に登録されると来訪者が飛躍的に増加し、なかでも欧米からのインバウンドの割合が増えるという傾向があります。こうした歴史や文化に関心のある観光者は、これまでのマス・ツーリズムとは異なるニーズを持っているため、アドベンチャー・トラベルなど、新たな観光振興の分野が創造できると考えています。

四つ目は国際貢献の観点です。現在、ユネスコではESD (Education for Sustainable Development) という取組を行っています。これは、国際社会のなかに存在する、差別、貧困、環境破壊など様々な問題に対して、まず自分たちの問題として考え、できることから行動することによって今より良い国際社会をつくっていくという取組です。

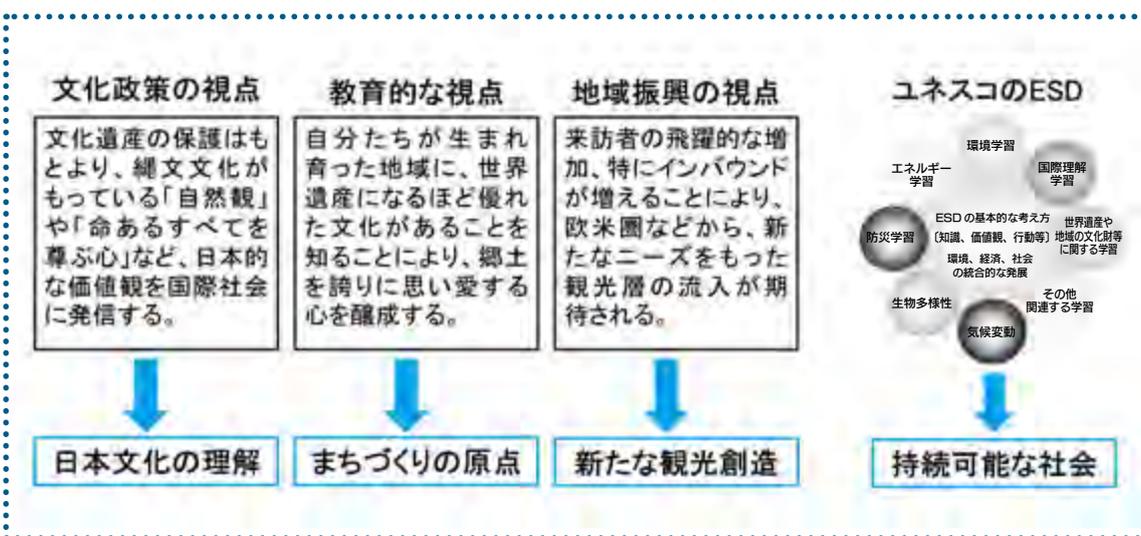
また、国連では17の具体的な目標を2030年までに達成するSDGs (Sustainable Development Goals) を推進しています。縄文文化が内包する自然との共生や命ある全てのものを尊ぶ精神を普及することで、こうした取組にも貢献できるのではないのでしょうか。

世界遺産登録後の課題と期待

世界遺産登録を申請している「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、全部で17の遺跡で構成されています。こうしたシリアル・ノミネーション*の場合、特定の資産に来訪者が集中するという課題があります。そうした状況を回避するためにも、縄文文化の価値を示す全体のストーリーのなかで各遺跡の位置づけを説明していかなければなりません。また、北海道の場合は道南の6つの遺跡だけでなく、道央から道東、道北へと波及を広げていかなければなりません。

このためには、北海道固有の歴史に光を当てることが大切だと考えています。縄文文化が終焉を迎えた後、本州が農耕社会に変わり弥生文化、古墳文化と進んだなか、北海道は続縄文文化、オホーツク文化、そして擦文文化を経てアイヌ文化へと続く独自の歴史を歩きました。これを北海道全体の魅力として発信し、地域の連携を促進することが必要です。

2016年度から始まった「第8期北海道総合開発計画」では、「世界水準の観光地の形成」が掲げられ、縄文文化やアイヌ文化など地域の文化を世界水準に磨き上げることが目標になっています。白老町に整備されたウポポイ (民族共生象徴空間) のオープンを機に連携を図ることで、北海道独自の歴史と文化の魅力を発信できる最高の機会が訪れると考えています。



* シリアル・ノミネーション
世界遺産の登録に際し、同じテーマ、ストーリーでくられる複数の資産を一つのまとまりとして関連づけ、全体として世界遺産の要件を満たす「顕著な普遍的価値」を有するものとして推薦すること。